

## 早熟プリンスメロンの収益較差について

宮田 忠 男

(鹿児島県農業試験場)

MIYATA, T.

## Studies on the Variance of Incomes among Early Maturing Prince-Melon Farms.

農業経営の最終目標は所得の最大化であり、産地発展の条件は所得の高位平準化であろうが、早熟プリンメロンの所得は露地野菜の中では高い水準にある一方、所得の農家間較差は大きい。

ここでは鹿児島県の代表産地、曾於郡有明町の実態調査をもとに収益較差の規制要因をみた。

## 1. 調査対象の位置づけ

昭和43年度に栽培農家12戸、面積1haに始った栽培は昭和48年度には264戸の80haに達し、県1位の産地として県経済農協連共販面積の27.4%を占めている。栽培型は早熟栽培が主体であり、組織は一貫して農協を核とする出荷組織として発展し、育苗施設と集選果施設の設置に伴い組織は一段と強化されている。栽培部門は育苗が農協委託で栽培体系は技術協定によって統一され農家間較差はさほどない。

## 2. 経営成果と農家間較差

項 目	単位	平均値	標準偏差	変動係数	レンジ
生産量 (10a)	kg	1,927	281	14.6	1,052
“(1株)	”	3.75	0.57	15.2	2.08
果数 (10a)	果	4,827	649	13.5	2,337
“(1株)	”	9.3	1.3	14.1	5.1
平均1果重	g	399	18	4.5	58
秀果生産量 (10a)	kg	418	245	58.5	869
価格 (1kg)	円	243	13.3	5.5	52
第1次生産費 (10a)	”	200,830	4,620	2.3	14,320
粗収益 (10a)	”	426,210	66,792	15.7	224,200
所得 (10a)	”	194,080	49,254	25.4	175,480
所得率	%	45.0	4.7	10.5	19.1

昭和49年産、調査農家 19戸

## 3. 収益較差の規制要因

農家間の所得較差は大きく、これの較差要因は生産量で、それは1株の生産果数多少によった。すなわち、

①所得は粗収益から経営費を差引いたものであるが、経営費の農家間較差は小さく、所得較差の要因は粗収益較差であった。②粗収益は生産量と価格の積であるが、価格較差は小さく、粗収益較差の要因は生産量較差であった。③生産量は生産果数と1果重の積であるが、1果重較差は小さく、生産量較差の要因は生産果数較差であった。④生産果数は株数(植付本数)と1株果数の積であるが、株数較差は小さく、生産果数較差は1株当りの生産果数較差であった。⑤価格は現段階において所得較差の要因とはならなかったが、生産量の農家間較差がなくなる時点では大きな較差要因となろう。

所得較差は今後の産地、農家の持続的発展と規模拡大において大きな阻害要因と考えられるので、所得の高位平準化対策「着果の安定化」が現時点での課題である。

## 収益較差を規制する要因間の相関関係

項 目	相関係数	決定係数
粗収益と所得	0.993	0.986
第1次生産費と所得	0.378	0.143
生産量と粗収益	0.812	0.659
価格と粗収益	0.435	0.189
生産果数と生産量	0.946	0.895
1果重と生産量	0.383	0.147
1株果数と10a生産果数	0.922	0.850
1株果数と1果重	-0.020	0.001
緑条斑発生と秀果生産	-0.628	0.394
秀果生産と価格	0.461	0.213

昭和49年産、調査農家 19戸

## 調査方法

技術部門では生育、着果、緑条斑と緑色斑点、病害虫発生について週1回(計4回)のほ場調査を行い、経営部門では聞き取り調査、販売部門を出荷伝票によった。